

中学生における社会的効力感 —尺度の信頼性・妥当性の検討—

○ 井戸本 陽（大阪府立吹田支援学校）

牧 郁子（大阪教育大学）

目 的

さまざまな社会問題が存在する現代では、子どものうちからそれらの問題について考え行動を起こす力が重要である。人が行動を起こす力の指標として Bandura（1977）の自己効力感がある。川嶋・大淵・熊谷・浅井（2012）は、Bandura（1977）の自己効力感を援用して「私一人が行動を起こしたところで、世の中を変えることはできない」「自分が政府や行政に何か影響を与えている」の2項目からなる社会的効力感測定尺度を作成している。しかしながら項目数が少なく尺度として十分ではないこと、項目内容に政府や行政が関わっており中学生の日常の行動範囲を超えていることから、中学生の社会的効力感を測定するために使用することは適切ではないと考えられる。そこで本研究では、中学生の社会的効力感を「自分は、周りの環境をより望ましい方向に変化させるために、発言や行動ができる」と定義し、中学生向けの社会的効力感尺度を作成して、その信頼性・妥当性を検討した。

方 法

1.被験者

大阪府内と奈良県内の中学校に通う中学生 452 名を対象に調査を行った。うち 442 名（男子=210 名、女子=232 名、平均年齢=13.19 歳、SD=0.65、有効回答率=99.3%）の有効回答を得た。

2.調査用紙

中学生 160 人を対象に行った予備調査において選出された、20 項目の質問紙を用いた。また妥当性検討については、「自己効力感測定尺度」（桜井、1987）、「社会的事象に対する関心・意欲尺度」（前田・新見・加藤・梅津、2010）を用いた。

3.手続き

「まったく当てはまらない：1」～「とても当てはまる：5」の 5 件法で回答を求めた。調査方法は、調査先の各中学校において教員に教示、質問紙の配布を依頼し、回答は学年・性別・年齢のみを記述させ、無記名式で行った。

結 果

因子分析を行った結果、20 項目のうち 14 項目で解釈可能な 2 因子が抽出された(Table1)。第 1 因子は、集団や取り組みに参加することで自分自身を含む環境が改善され、行動した結果が自身の利益にも随伴する項目で構成されていることから、「個人的利益を含む社会的効力感」と命名した。第 2 因子は、他者への利益の要素が強く、行動した結果、直接自身に利益が随伴するとは限らない項目で成り立っていることから、「利他的な社会効力感」と命名した。また、信頼性係数としての Cronbach の α 係数は、第 1 因子は.79、第 2 因子は.71 であり、各因子共に十分とはいえないものの、許容しう

る範囲の内的整合性が確認された。

妥当性分析では、作成した尺度の「下位尺度得点」と、自己効力感尺度の合計得点、社会的事象に対する関心・意欲尺度の「下位尺度得点」との間でピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、「個人的利益を含む社会的効力感」「利他的な社会的効力感」ともに自己効力感と有意な中程度の相関が認められた。「社会的事象に対する関心・意欲」尺度の間では、「利他的な社会的効力感」と「公民への関心・意欲」において有意な中程度の相関が認められ、併存的妥当性が認められた。

Table1. 社会的効力感測定尺度 因子分析結果

	因子1	因子2	共通性
11. 私は、授業中に友達と教え合いながら、難しい問題に取り組むことができる。	.74	-.24	.40
12. 私は、自分からクラスの友達と積極的にコミュニケーションを取ることができる。	.72	-.11	.44
6. 私は、勉強が分からない友だちや兄弟に、勉強を教えることができる。	.53	-.03	.27
7. 私は、クラスをよりよくするために、学級会で意見を言ったり、委員会活動に取り組んだりできる。	.51	.16	.39
9. 私は、友達同士がもめていたら、仲介に入ることができる。	.46	.14	.30
14. 私は、グループでの話し合い活動のとき、自分から発言したり話し合いに参加したりできない。(※)	.46	.10	.28
4. 私は、学校全体をよくするための企画や取り組みに積極的に参加することができる。	.41	.29	.39
5. 私は、自分から近所の人と積極的にコミュニケーションを取ることができる。	.38	.28	.35
10. 私は、地域の清掃活動やボランティアなどには自分から積極的に参加できない。(※)	-.22	.71	.36
13. 私は、学校で授業中に私語をしている友だちがいても、静かにしてもらうための注意ができない。(※)	-.10	.62	.32
19. 私は、学校の帰り道にボーイ捨てをしている友達がいたら、やめてもらうために注意ができる。	.04	.50	.28
20. 私は、地域のイベントで、地域に人たちと協力して、運営や企画ができる。	.14	.50	.35
3. 私は、街中で困っている人があるのを見つけたら、声をかけて手助けすることができる。	.14	.43	.28
8. 私は、掃除の時間に掃除をまったくしていない友だちがいたら、掃除をしてもらうように注意ができる。	.19	.36	.25
Cronbachの α 係数			.79 .71
因子間相関			.60

※は逆転項目を示す。

考 察

因子分析の結果、中学生では利益の所在によって社会的効力感が機能することが示唆された。第 1 因子は行動することで、仲間からの承認という利益を得られる可能性のある項目で構成されている。一方、第 2 因子では地域との関わりや友達への注意など、行動の結果が必ずしも仲間関係を良いものにするとは限らない項目が中心となっている。このことから、利益の所在で社会的効力感が機能する背景には、中学生という発達段階における仲間関係の重要性が影響していると考えられる。